

まえがき

国語はすべての教科の基礎になるため授業時間がたくさんあります。低学年や中学年では毎日のように国語の勉強があります。一年生では、鉛筆の持ち方や姿勢、ひらがな・かたかなの正しい書き方から勉強が始まります。そして、物語を読む楽しさや説明文の読みとりを学びます。二年生から六年生にかけては、文章がだんだん長くなつていき、よく考えて読まないと意味が理解できないようなむずかしい内容になつていきます。

その際、大事なはたらきをするのが「板書」と「ノート指導」です。板書によつて読むポイントや考えるポイントを子どもたちに示すことができるからです。また、課題について考えた子どもたちの発言を板書することによって、子どもたちに「主体的・対話的で深い学び」をさせることもできます。

ノート指導も大切です。板書を見ているだけでは、十分に学習内容を深めることができません。学習内容をノートに整理したり、課題について自分の考えを書いたりすることによって、思考を深めることができます。そこで、本書では「板書にあまり自信がない」「ノート指導がよくわからない」という教師のみなさんに役立ててもらえるように「板書」「ノート指導」についてわかりやすく著してみました。

最後になりましたが、本書を書くにあたつては、編集部の根津佳奈子さん、新留美哉子さんにたいへんお世話になりました。また、今井久恵さんにはすてきなイラストを描いていただきました。ありがとうございました。

ました。

まえがき 3

板書編

授業展開に合わせた 板書のはたりつき

第1章

学習課題をわからせる 16

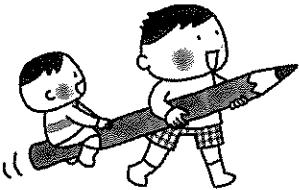
学習内容の確認を図る 18

授業へ集中させる 20

思考を深める 22

- 課題解決の手がかりを示す 24
絵や写真や図を提示する 26
組み立てや構成など全体をわからせる 28
友だちの考え方を確かめる 30
学習内容の定着を図る 32
学習の過程や流れをわからせる 34
ノート整理の示範になる 36

- 【トピック】 黒板はいつでも書いて、いつでも消せる 38



これでつまべる 板書の基本

39

- 板書の特長をおさえ 40
金真でじつしょに学ぶ 42
授業の流れに沿って書く 44
色を使って強調したり、表現したりする 46
子どもの理解度に合わせて書く 48

子どもを板書に参加させる	50
板書内容の構成を工夫する	52
板書ルール① 縦書きを基本にする	54
板書ルール② 「日付」「教材名」「めあて」「まとめ」を書く	56
板書ルール③ 書いたものを消して、また書かない	58
板書ルール④ 想定される反応でも短冊にして準備しない	60
板書ルール⑤ 子どもの考えの板書方法を工夫する	62
板書ルール⑥ 教材文を複数させるとときの板書はゆづくり書く	64
コラム2 カードや画用紙を貼つて考えを分類・整理する	66

第3章 授業が変わる！ 子どもが食いつく！ 板書のポイント

67

教師の立ち位置と姿勢	68
チョークの使い方	70
板書の文字の大きさ	72
見やすい文字を書く「ジ	74

板書のレイアウト	76
板書量の基本	78
板書を見やすくする工夫①	80
板書を見やすくする工夫②	82
板書を見やすくする工夫③	84
板書するスピード	86
板書の速さの使い分け	88
板書のタイミング	90
板書の消し方	92
コラム3 模造紙にモデル文を書いて提示する	94



95

第4章 子どもがもつと意欲的になる板書術

「めあて」の明示で授業の「ゴール」を意識化させる	96
いろいろな考えの集約で授業に引きつける	98
吹き出しを活用する	100



6

重要な内容を短冊にする	102
ネームフレートを活用する	102
子どもを板書に参加させる	106 104
黒板の開放で話し合いを盛り上げる	108
板書の消し方で子どもの意識を集中させる	108
□ラム4 模造紙に教材文を書いて提示する	112 110

第5章 教師の板書力の伸ばし方

教師の板書力アップを支える教材研究	114
身になる板書計画の立て方	116
黒板での板書シミュレーション	118
板书画像での振り返り	120
□ラム5 絵や写真や図を貼って思考を促す	122



113



8

ノート指導編

第1章 授業展開に合わせた ノートのはたらき

忘れないようにするために備える	126
整理し保存する	128
思考力を育てる	130
文字練習をする	132
□ラム6 ノートを見たら何について学習したのかをわかるようにする	134

125

第2章

これでうまくいく! ノート指導の基本

135

ノートの種類と選び方	136
------------	-----

鉛筆の選び方と赤鉛筆の使い方	138
消しゴムの使い方	140
定規の使い方	142
ノートを書くスピード	140
四角い囲みの使い方	144
矢印の使い方	148
ワークシートの使い方	146
授業展開に合わせたノートのタイミング	152
ワークシートの使い方	150
授業展開に合わせたノートのタイミング	152

【コラム】 吹き出しに自分の考えを書かせ、ノートに思考過程を残させる 154

第3章 ノートが変わる！ 子どもが書きたがる！ 指導のポイント

文字をていねいに書かせる	156
板書を正しく書き写させる	158
自分の考えをノートに書かせる	160
ノートの書き方を具体的に教える	162

ノートをほめて励ます	164
友だち同士でノートを見せ合って学び合わせる	166
低学年のノート指導の基本	168
中学年のノート指導の基本	170
高学年のノート指導の基本	172
【コラム】 自分の考えをノートに書かせて、理解度や考え方を把握する	174

第4章 国語力を育てる！ 単元別ノート指導

「言葉の意味調べ」のノート指導のポイント	176
漢字のノート指導のポイント①	178
漢字のノート指導のポイント②	180
詩のノート指導のポイント①	182
詩のノート指導のポイント②	184
説明文のノート指導のポイント①	186
説明文のノート指導のポイント②	188



175

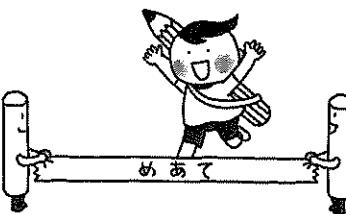


10

説明文のノート指導のポイント③
物語のノート指導のポイント①
物語のノート指導のポイント②
物語のノート指導のポイント③
コラム9 メモのとり方を教える
190
192
194
196
198

第5章 子どものノート力の伸ばし方

ノートに書かせる基本項目	200
子どもが書きたがるノート点検	202
子どもを励ます赤ペン術	204
視写力・聽写力をつけるノートの書かせ方	206
学びを高めるノートでの振り返り	208
ノート力を高めるスマールステップ	210
ノート力を高めるまとめ方①	212
ノート力をつけるまとめ方②	214
ノート力をつけるまとめ方③	216



199



12

板書のポイント3 板書の文字の大きさ

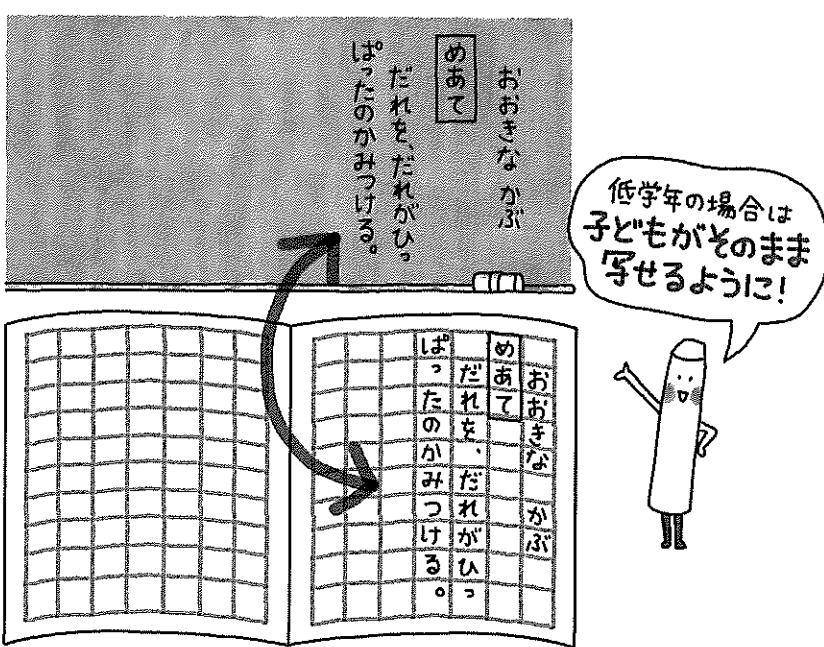
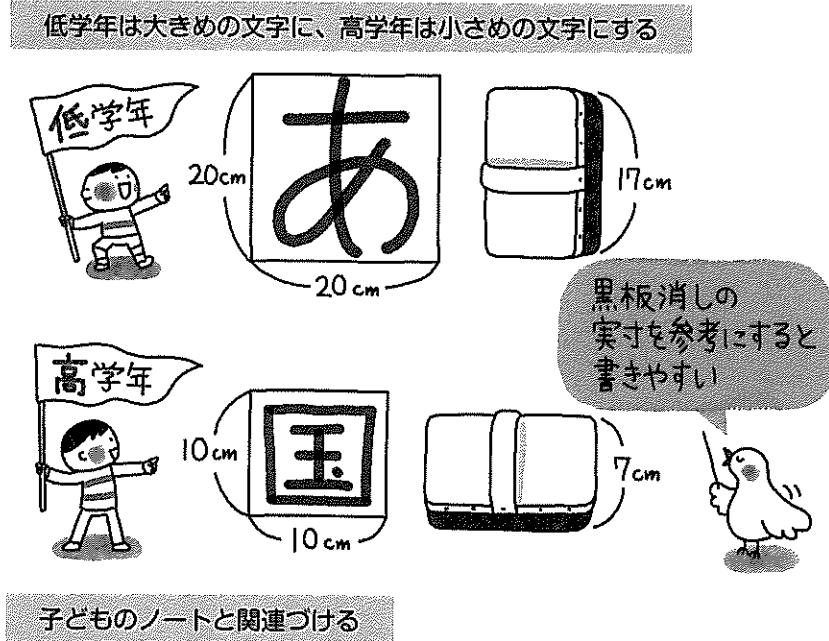
●低学年は大きめの文字に、高学年は小さめの文字にする

授業では、板書の文字の大きさに気を配ることがとても大切です。それは、文字が小さすぎると、後ろの座席の子どもが板書を読みづらいからです。反対に、大きな文字で書きすぎると、一枚で書ききれず、何枚も板書を書くことになってしまいます。

板書の文字の大きさは、学年によってちがいます。板書する量が少ない低学年は、およそ20cm²平方大の大きさにします。板書する量が多い高学年は、およそ10cm²平方大の大きさにします。板書するとときはいちいちものさしで測ることができないので、黒板消しを活用するとちょうどよい大きさに書くことができます。黒板消しを縦にした長い一边によるわくの大きさの文字が高学年にならうどよい大きさになります。

●子どものノートと関連づける

板書の文字の大きさは、子どもがノートに板書を写すこととも関連があります。小さな文字により板書の一行が長すぎると、子どものノートには一行が収まりきりません。とくに、マスのノートを使う低学年の場合は、子どもがそのまま板書をまねて写すことができるよう配慮する方が大切です。



消しゴムの使い方

● 消す箇所に応じて消し方を変える

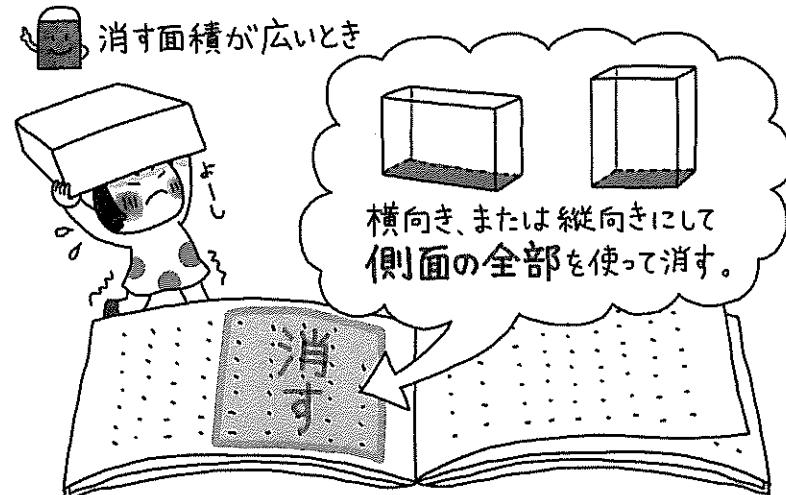
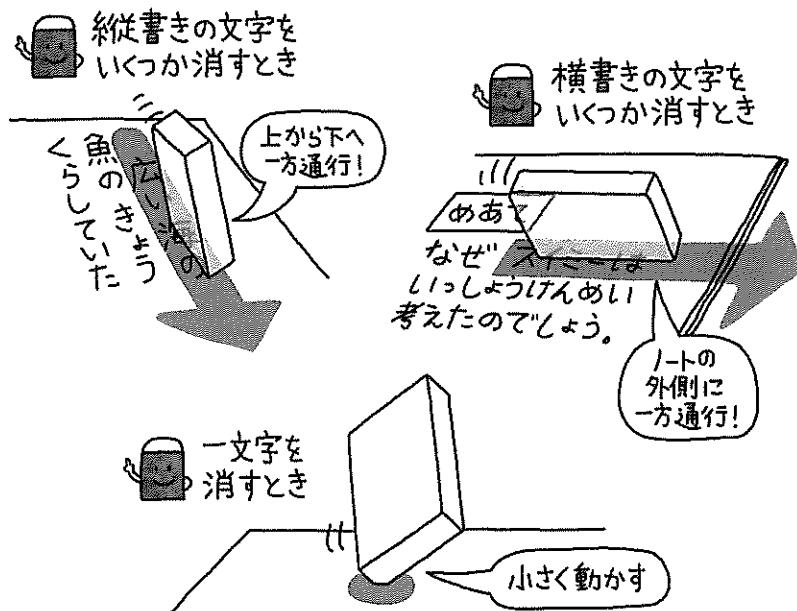
ノート指導では、消しゴムの使い方を教えることも大切です。消しゴムの使い方がよくないと、消した箇所が黒くなってしまったり、消し残しがあったり、消さなくてよい箇所まで消してしまったりするからです。そこで、まず白色プラスチックの消しゴム（香りのないもの）を持たせます。次に、消す箇所に応じて消し方を変えることを教えます。

- ・ 縦書きの文字をいくつも消すときには、消しゴムを縦向きにし、その辺の部分で上から下へ一方通行で動かして消します。
- ・ 横書きの文字をいくつも消すときには、消しゴムを横向きにし、その辺の部分でノートの外側に向けて一方通行で動かして消します。
- ・ 文字を消すときには、消しゴムの角を使い、小さく動かして消します。

消しゴムの角を使って消すことが多いと、すぐに角がまるくなってしまい、使いづらくなります。そんなときには、消しゴムのすべての角を使うようにします。

消す箇所の面積が広い場合には、消しゴムを縦向きにして側面の全部を使って消したり、消しゴムを横向きにして側面の全部を使って消したりするとよいでしょう。

消す箇所に応じて消し方を変える



低学年 ノート指導の基本

●ノートの書き方の基本を教える

低学年のノート指導では、まず教師が子どもたちの持っているノートとマス目の数が同じノートを用意します。それは、子どもたちに教師の指示通りにノートに写させるためです。板書計画を実際にノートに書いてみると、どのくらいの板書量が適切かがわかります。低学年は板書をノートに書き写すスピードが遅いので、多すぎないように気をつけます。一年生なら二ページくらい、二年生なら三～四ページくらいを目安にするとよいでしょう。また、板書をノートに書き写す時間をしっかりと位置づけることも大切です。

子どもたちに板書をノートに書き写せるときには、次のことをおさえます。

- ・一行目に「日付」、二行目に「教材名」、三行目に「作者名」（物語の場合）・「筆者名」（説明文の場合）、四行目に「めあて」を書かせます。
- ・子どものノートと同じマス目の数になるように板書した内容を、その通りにノートに写せます。その際、一マス空けるところには□印を板書に書きますが、ノートに書くときは印をつけないで一マス空けさせます。
- ・赤色で板書されているキーワード、キーセンテンスなどは、赤鉛筆を使ってノートに書かせます。

